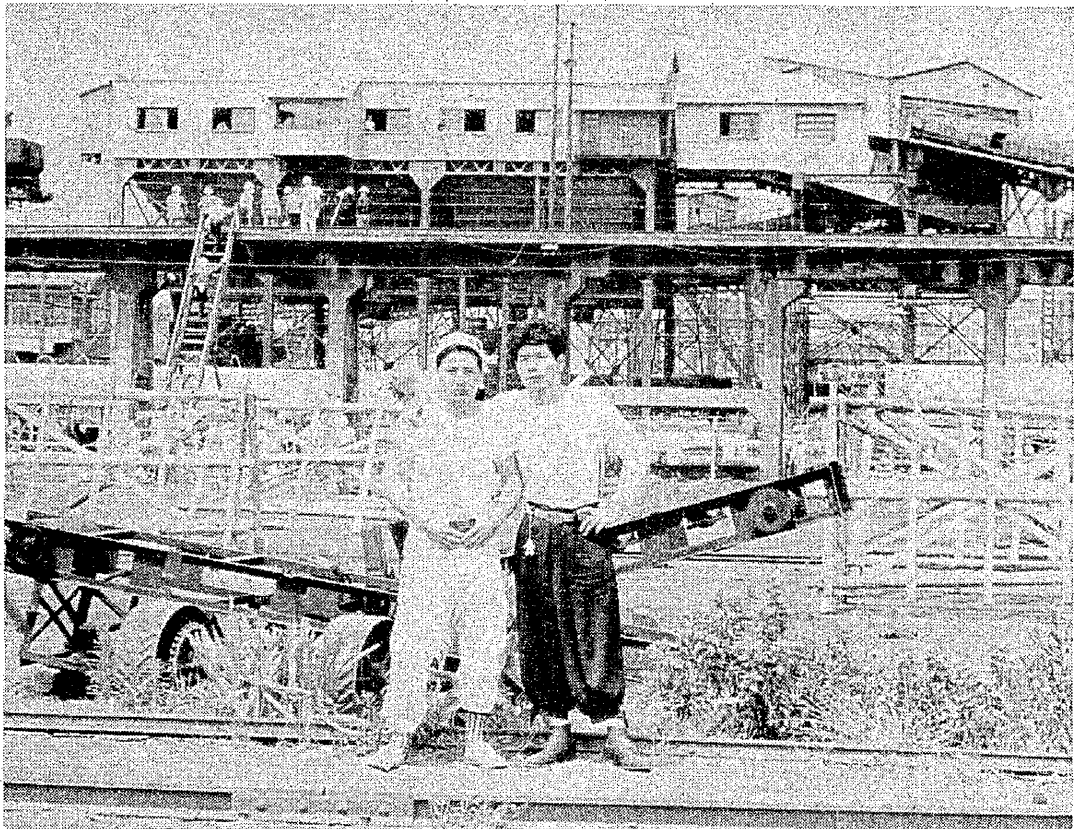


原告団

遺族・CO裁
判、災害責任
追及、特集号
第二百十五号

原告団レポート

CO患者——
平 弘美さん



昭和35年、あの激しくたたかわれた三池闘争の8月、ホッパー前線で友人と。
(橋架の向うにバリケードやホッパー小屋が見える。)

雨の作業所

もうすぐ十一月十九日の十九周年を迎えるという雨の日、万田作業所の控室にはストーブに火が入られていた。
急に冷え込んだせいもあるが、もう冬を感じさせるような雰囲気である。
農園の作業ができないというのが、いわば待機の様子なのだが、雨はひびく降るでもなし時折り小雨という程度ではあるが、昨日から続いているので、万田作業所の人々も何となく時間をもてあましているというふうである。
平弘美さん(昭和四年三月一日生まれ、五十三歳)は、昭和四十六年十月万田作業所が開設されてからここで働いている。
働いていると言っても、ここから数百メートル離れた農園の作業で、雨が降れば作業は中止となる。労災病院を退院させられて作業所が開設させられたころは、五十人



昭和40年三池CO患者のために開設された大牟田労災病院の玄関前でCO患者の仲間と。

原万田社宅

「昔のことは、よと憶えたらな……」と、断片的に生きたことを語るのを整理すると、およそ次のようになる。
生まれは大牟田市神田町一八二番地、父は栄一さん、母はキサキさん。四人兄弟で男三人、女一人。大正洋戦争の末期に神田町の家が、

生命は助かったが重症

なにもかもうまくいかぬ

わずかな補償では許せない

思っ……このこと。

二十七年、三つ年下の民子さん(熊本県玉名郡菊水町の出身)と二十四歳で結婚する。
住いも荒尾市原万田社宅百一棟へ。しかしのちに社宅合理化で転居させられ、同じ原万田社宅の百五十三棟へ移る。現在の住いである。

重症の患者

二十六年九月に万田社宅が開鎖された。五日間の意識混濁が続いた。三川社宅を併合したのにも関わらず、三川社宅の仕組工となり、のちに三川社宅の仕組工として、うわごとを言ったりしたという。
元気がよくなったが、「組合運動にたいへん関心はなかった。三十五が痛く、いまにも頭が割れるので年の三池闘争では、友だちが首切

られたから腹が立って……、それだ……」
その日、つまり三十八年十一月九日、平さんは二十六部内の常務主任として入社していた。
もう作業を終えて現場を離れてはいた。本人の記憶がないので定かではないが、二十六部の岩盤位置をのぼっていたのではないだろうか。
気がついたのは天領病院の一室だった。五日間の意識混濁が続いた。両親はもとより、民子さんにとっても耐え難い日々であった。子供も出来なかったし、ついに二人のきずなはぶつりと切れ、民子さんは家を出た。
それは「蒸発」と言われるものだったが、それ以来平さんの苦渋の生活が続くことになった。



万田作業所の農園のビニールハウスの中で色とりどりに咲いている菊と平さん。

妻の蒸発が

翌三十九年八月、平さんは九大病院を希望退院した。もとより回復したためではない。本人の希望というには理由があった。
被災から九大病院への入院までそれこそつきっきりで看病に尽くしていた民子さんが、九大では完全看護のため付添いが必要としないため、しだいに足が遠のきはじめた。
COガスの後遺症からくるいらぬは続く、精神的な苦痛が重なる……というふうにもなっていた。
民子さんにしてみれば、どうしようもない淋しや悩みもあったろうが、その行動に黒い影がさしこんでいった。
平さんは、無理に退院したものの天領病院への通院治療ではどうにもならなかった。医師団の診察の結果、四十年九月、その年の四月に開設された大牟田市吉野の労災病院に即入院となった。
被災後の夫婦の生活は、老いた両親はもとより、民子さんにとっても耐え難い日々であった。子供も出来なかったし、ついに二人のきずなはぶつりと切れ、民子さんは家を出た。
それは「蒸発」と言われるものだったが、それ以来平さんの苦渋の生活が続くことになった。

ひとり暮らし

「なにもかもうまくいかない。腹が立って、写真もなにも全部焼いてしまっ……、なにも残っていない……」
それ以後民子さんには会っていない。人を介して「まだ一緒に」という話もあったが、意地もあり見向きもなかった。その民子さんも昨年五月に死没したと、それもこれも爆発による被災したことが起因しているのである。

再婚の話もいくつかあったが「適当な人がいたらと思うが、こんな状態ではね……」などと消極的だ。母キサキさんは四十二年八月六日七十九歳で没し、父栄一さんは四十八年三月十九日八十三歳で孤独の生涯を閉じた。
平さんは、毎日自転車で万田作業所へ通う。一人暮らしははびこり。別に趣味もない。作業所では植木や花や鳥を手がけているが、家ではいっさいやらない。
一人で炊事をし弁当を詰める。気に入らないと捨ててしまいうが、その生活が目に映る……である。
しかし家の中は整然としている。掃除もいっしょくた、乱れはない。近所の人の話では、溝当番と決まっていれば、雨の中でも両合羽を着てちゃんと掃除する。辺りには草もない。
「一人だから生活に困るということはないけれど、こんな体にして許せない」と、平さん。
CO患者としての平さんは、七級に認定され、わずかばかりの年金を受給しているが、それですべてが補償されたのだろうか。あと一年数カ月で定年退職になるが、妻もなく、子もなく、家のこと、こんな生活のことを考えあぐねる毎日である。